第４回　金沢市都市計画マスタープラン策定委員会　議事要旨

日時：平成 20 年7月 10 日　15：00～17：00
場所：金沢市役所 本庁舎７Ｆ　第３委員会室

【金沢市都市計画課長挨拶】
【重点地区の現状と課題説明】

（委員）　３ページの中心市街地というのはだいだい色の部分だが、これは犀川と浅野川を挟んだ昔の街だ。ここの計画は「都市のコアとなる地域」となっているが、これからの時代、果たしてここがコアとなり得るのか、少し疑問に思う。なぜなら、駅西にかなりの部分、シフトしているのが現状だと思うからだ。すると、これはこのままでいいのか疑問である。今日これから議論していく市街地では、今後人口減少や高齢化も進んでくると思うし、全部リンクしてくるのではないか。考え直す必要があるのではないか。

（委員長）　中心市街地だけを見ると、そこが都市の中心であるという意味もあるが、ここでは住宅地と商業地とを分けて考えた中での住宅地の中心という意味だと思う。

（委員）　今後、駅西のほうにシフトすることは考えられないのか。

（委員長）　今言われるのは商業関係だと思うが、中心商業地区の赤色は一応、駅西にもある。

（委員）　黄色の一般住宅地を見ると、駅西は今後、人口増になってくるのではないかと思う。要するに、金沢城の城壁の内と外のような二極化が金沢では起きてきているのではないか。

（委員長）　ニュータウン、オールドタウンみたいな考え方を入れたらどうかということか。

（委員）　そうなると、まちの今後の政策が少し違ってくるのかなと思う。

（事務局）　土地利用の現状と、その背景にある人口の問題、高齢化、都市があまり伸びていかないということを考えると、拡大傾向は無理があるだろう。そうすると、どこを重点的にまちづくりをしていこうかということになって、まず一つは中心市街地をコンパクトなまちにしていきたいというところがあるかと思う。とにかく現状を押さえ、過去の歴史性や重層性を大事にしていこうという考えとしては、これは間違っていないと思う。駅西の将来像も、現状を踏まえてきちんと押さえていこうということだ。まず現状はどうか、動向はどうかということだ。

都市計画マスタープランは 20 年先をということで、概ね 10 年は経ったので、その確認をし、将来はどうあるべきかという方向性を示していきたいのである。地区によって状況や課題は変わってきたりしていると思うので、それはまた示していき、議論していただきたい。

（委員長）　ニュータウン、オールドタウンに関してだが、ヨーロッパでは非常に

高い建物でできていたので、郊外にニュータウンをつくったことが一部であった。金沢もそれをまねて、1970 年代に「60 万都市構想」をつくり、駅西地区をニュータウン、中心部をオールドタウンという考え方を出した。しかし、日本とヨーロッパでは少し違うのと、金沢は都市規模がそれほど大きくない。政策としても、都心軸構想という形で、少し変化してきている。政策として中心市街地活性化というような形で、商業も居住も中心部を大事にしていき、郊外は連携していくという計画である。ニュータウン、オールドタウンという政策は、日本には合わない。ヨーロッパでも今はもうそういう政策はとっておらず、中心市街地を中心にしたテーマになっている。

（委員）　中心市街地を活性化するには、かなりのエネルギーが必要だろう。

（委員長）　前回のマスタープランでもその点を重点でやってきた。まだまだ変わっていないが、それでもやるという計画だと思う。

（委員）　コンパクトシティ化には賛成だが、防災の面においても、中心市街地に住宅を増やすのは危険ではないか。45 万の市民が中心部に住むことは不可能なので、例えば商業地域を重点的にし、住宅地はその周辺にしていくというような具体的なプランがあればいい。「fibercity」という本があるが、これから都市の人口縮小時代に向けて、例えば中心部の空き家や駐車場を緑地にして区切りを作り、防災に役立てるようにしている。

（委員長）　中心部を活性化させるのもいろいろ問題があるので、基本的な施策のようなものを提示してほしい。

（事務局）　一つは、まちなかが空洞化しているので、空き家や空き地などをこまめに整理し、そういうところに緑地を配置したりして、やわらかい区画整理をしていこうと思っている。安全も確保しながら居住環境の整備をしていこうと考えているわけだが、これは一気にはできない。やれるところから地道にやっていく。戸建てだけでなく、マンション系も地域に配慮した住宅政策をとっていこうということで、基本的なスタンスを検討しているところだ。

（委員）　私もまちなかに住んでいるが、まちなかは風情があっていい。今、定住促進をしているが、最近、マンションが多くなってきた。これは、低層化でまちなみを保存しようとしていることと矛盾する。

（委員長）　金沢は景観を含めてかなり独自の政策をとってきている。マンションの高さ規制ももっと低い方向で進んできている。裏通り的な所だと、今までのようなものは建てにくくなる方向に進むのではないか。高いか低いかは建て方にもよる。そういうところにもう一度住んでもらおうという政策を進めている。

（事務局）　12 ページの右下に、まちなかの方向性を出している。具体的な方針については、次回提案するので、議論してほしい。

（委員）　９ページで、私の住んでいる泉は宅地造成で田んぼがどんどん宅地になっていて、緑がない。具体的にそれに対して施策はあるのか。

（事務局）　一つは、公園や道路といた公共施設に緑を増やしていこうという方針は変わらない。一方、開発が行われるにしても、一定のレベルの中で植栽を入れるように指導している。また、支援制度も設けている。今後は、行政だけでやっていてもなかなか進まないので、個人の敷地の中での緑化や壁面の緑化についても、市として積極的に方向性を示し、一定の支援をするという形を考えている。

２ページに、「都市を包む水と緑の環境」ということで、市民の憩いの場となる公園緑地等のレクリエーション施設の整備を推進していくということ、平地・中山間地の農地についても重要な自然環境としての保全を推進していくことが必要だと書いている。このように、まち全体として緑を増やしていくことが必要だと考えている。

（委員長）　天神町緑地は、古い市街地に比較的大きな公園を造り、そこに防災的な施設を整備した。赤い所はそういう拠点的なものも造りながら整備していく必要があると思う。

（委員）　有松から泉にかけて、裏側のほうはとても宅地化が進んでいる。是非とも緑を増やしてほしい。

（委員）　９ページだが、田や畑があるのに黄色なので、今のうちに手を打つ必要があるのではないか。道路はかなり整備されているが。

（事務局）　赤い所が ２０％未満と書いてあるが、これはランドサットという、宇宙から撮影をしたものなので、田畑も緑とカウントする。しかし、宅地を造成して区画整理などをしていくと、緑でなくなり、環境率としては赤くなる。そういう傾向である。

具体的にこういうデータを示して、拡大傾向の市街化区域を今後も拡大することはやめようという方向性を出した。市街化区域内の農地もあるだろうし、市街化調整区域は緑地化をしていこうということなので、これ以上の拡大はないような形で進めていきたい。

一方で、人口が縮小してくると、現在ある宅地も、宅地の形で残すのがいいかどうかも議論していく必要がある。赤は要注意なので、今後どうあるべきかを地域の中で議論していく形になると思う。

（委員長）　もっと細かい単位で見ていく必要がある。黄色の地域については、これ以上、宅地化していくことはよくないのではないか。

（委員）　ランドサットのデータはどれくらいの精度があるのか、疑問でもある。というのも、まちなかや周辺部は緑地が減っている所が多いが、城南は増えている。西南部、長田、大徳、湊、緑など急に減った所は、本当に宅地化が進んで緑地が減ったのか。ランドサットが撮った時期によって違うと思う。今のように緑がたくさんある時期と、冬に撮ったデータでは、全然違うはずだ。よく精査したほうがよい。人間の目で面積を数えたわけではないと思うので。

（委員長）　城南はなぜ緑が増えているのだろう。

（事務局）　犀川左岸の緑地がかなり整地されてきたことが緑地としてカウントさ

れたりすると、ポイント的に上がってくるのだと思う。金沢市としても、緑のマスタープランで現状の確認をしているので、データの精度を確認し、きちっとしたデータを提供したい。

（委員長）　ランドサットデータはそもそも精度が粗いので、大体どれくらいかを見ればよい。

（事務局）　この辺については、今後、地域別に入ってからその地域の方々の意見を聞きながらやっていきたい。

（委員）　４ページの「世界都市金沢の実現に向けて」だが、どんな基準なのか。いろいろな定義づけがあると思うのが、金沢が目指すのはどういう世界都市なのかがはっきりしていたほうがよい。

また、７ページに「保全と開発の調和」とあるが、「開発」はどちらかといえば「保全」をさまたげる部分が多いと思う。基本的には「再生」の方向で検討することが重要ではないか。積極的に開発を進めながら、保全も考慮していこうということなのか。開発すれば必ず壊れる。そういう意味では、「保全」と「再生」という言葉のほうが、今の時代には受け入れていただきやすいのではないか。

（事務局）　非常に難しい話だ。「世界都市」という言葉は、上位計画の「世界都市金沢」の小さくともきらりと光るという中で、金沢のまちのありようを示している。その中では、今までの金沢の重層的なまちのつくりということで、ただ保全・保存するだけでは活き活きとしたまちにならない。そこの折り合いをどうつけていくかということが、「開発」と「保全」という表現になっている。ここにきて、中心市街地は歴史的な要素を大切にしていこうと議論が進んでいるので、その辺と、いろいろな業務を活性化するために必要なものはそれなりにちゃんとやっていこうという考え方になっている。ここに書いてあるのは、上位計画の方向性である。

（委員）　「世界都市金沢」が非常に難しい。一般的にいわれる世界都市は、人口が多いとか、経済的な中心都市であるというような定義づけがあり、それに基づいて世界都市として評価されている。しかし、それ以外にいろいろあると思う。金沢は伝統文化や古いまちなみに特化した形で世界都市として主張していくのか。新しいものと古いものが混在しているまちはたくさんあると思う。金沢はどこに属した形で世界に主張できるのかということになってくると、それなりのものがないとなかなかできないと思う。

私は小さいころは田舎にいたので、金沢はあこがれのまちであった。その当時は、「おやま」という表現が使われていて、「おやま」へ行きたいという気持ちが非常に強かった。しかし、今はそういう気持ちを持っている子供たちはいないのではないか。そういう意味で、世界に主張できる金沢とはどういう金沢なのか、イメージできなかったので。

（委員長）　いろいろな分野があるので一概には言えないが、市長の思いは古いだけの金沢ではないと思う。一定の個性のある、未来も含めて現代的な都

市としての金沢だと思う。だから、個性とか、独特の輝きを持つとかに力点があるだろう。

（委員）　創造性だね。

（委員長）　そうだ。そういうキーワードに重点があるのではないかと思っている。

（委員）　５ページの「安全・安心な都市づくりの方針」について、私は金石地区に住んでいる。行き止まりは日本海なのだが、金石町が一つできるくらいの埋立工事が進んでいる。しかし、まちなかは道路が狭いので、大きな道路を真ん中につけなくてはいけないという話をしている。消防車が通れるような道路とか、防災のまちづくりを考えているのだが、金沢市の中心街にもたくさん狭い道路があるのか。

（委員長）　ある。

（委員）　金石では一度火事があったので、火事を起こさないことを第一条件としている。

（委員長）　金石・大野も、中心部のまちなか区域といわれるところも、基本的には同じだ。非常に古い時代に造られた建築や道路なので、そういうものを活かしながら、残しながら、道路整備や景観整備をしている。金沢市は今までは景観的な対応はある程度してきたが、まちづくりを含めてやるというのは、これからの大きな仕事だと思う。都市計画マスタープランは、その一つの重要な指針になると思う。

（委員）　３ページだが、野々市や内灘など地域を越えてつながっているところとの連携はあるのか。人口の調整を図るようなことはないのか。

（事務局）　マスタープランは市町ごとにつくることになっているが、広域的なことも考慮しなければいけない。お互いに切磋琢磨する部分も当然出てくると思うが、各々のマスタープランをつくり、それを広域的なマスタープランという形で位置づけるというのが、石川県の広域マスタープランの考え方である。内灘のマスタープランはどうなっているか、野々市のマスタープランはどうなっているかなどと情報を共有しながら進めていくことになると思うが、状況的には自分のところはどうやって活力あるものにするかと。例えばこちらに商業店舗を全部持ってきて、こちらは住居系だけというふうにはまちのありようとしてはなかなか難しいと思う。そこは情報をきちんと共有しながら相互調整し、決めていくことが大事だと思っている。両方のことを全部合わせて一度にやるのはなかなか難しい。しかし、広域のマスタープランをつくっていく必要があるという考え方を県としても持っている。

（委員長）　広域的なものは県が考えると思うが、市町レベルでの工夫や努力も必要ではないか。前回のマスタープランのときもそういう努力をしたが、今回も検討したほうがいいのではないか。

（事務局）　少なくとも情報の共有はきっちりしようと考えている。こちらの考えていることを内灘や野々市に伝え、向こうの状況も確認をする。金沢都市圏には当然入っており、人口の問題などは当然かかわってくるので、

連携していきたい。

（委員）　公共交通、歩行者優先のところだが、今、ガソリン代が非常に高騰しているので、自動車を使わず、自転車通勤が多くなっている。歩道は歩行者も歩いているので危ない。自転車の優先道路とか、これは思い切った投資をしないとできないが、非常に狭い道路の中で、これはどういうことをやろうとしているのか。

（事務局）　まず、金沢は簡単にまちなみを広げていけないという状況がある。すると、歩ける環境というのは、やはり自転車も歩行者も安全にということなので、段差や交差点についてはきちんと調査した上でやっていく。また、環状道路がある程度整備されてきたので、国道の交通量が減ってきた。国土交通省では、車線の一部を自転車通行帯というような形で整備をする取り組みもなされている。そういうことを調査・研究して、拡大できるところには拡大していきたいと思っている。今後、道路の整備状況に応じては、公共交通を主体としていくので、自転車と歩行者の分離を、例えば一般的な道路の１車線をつぶしてできないかということを含めて、検討していかなければならない。現状の中である程度改善して、どうしたら歩行者・自転車にやさしいまちづくりにできるかを織り込んでいければと考えている。

（委員）　まず、自動車の乗り方のマナー教育からしていかないといけない。本来、自転車は軽車両だから、車両側の一番弱い所だ。だから、左側通行が原則である。あるいは、少し広い歩道であれば「自転車通行可」となっている所を通行する。しかし、大人もそれを知らず、おかまいなしに走っているので、きちっと指導をして左側通行をある程度徹底させるだけでも随分違うと思う。歩道も、左は自転車、右は人という原則を守っていれば、事故も少ないと思う。

（委員）　おっしゃるとおり、大人も学生も自転車のマナーが悪い。

（委員）　全国一自転車の乗り方のマナーがよい都市を目指すとか。

（委員）　法律も変われば、今より少しはよくなるだろう。

【地域別の現状と課題説明】

（委員）　15 ページに、中央地区でトランジットモールの検討と書いてあるが、2000 年に香林坊から片町でトランジットモールシフトの実験をしたところ、周辺道路の渋滞は３％ぐらいしかなく、好評だった。その後８年たち、今またその機運が高まってきたのではないか。金沢駅から片町まで、そうすればいいのではないか。今後の予定はないのか。

（委員長）　実験では、周辺道路の渋滞状況はどうだったのか。

（委員）　一番大変なのはバスだった。少し迂回しないといけないので、百万石行列と同じような状況が一部に見られた。ただ、渋滞するであろうことを見越した地元の市民は、そこを避けて迂回したと思うので、思ったほどには渋滞しなかった。そのように考えれば、今、できないことはないと思う。

（委員長）　実験は日曜日だけだった。やるからには、日曜日だというわけにはいかない。すると、なかなか大変だろう。

（事務局）　実は昨年度、金沢の交通量がどうなっているか、パーソントリップ調査をした。一枚一枚配って、それをまた回収するということで、商工会議所などいろいろな方のご支援をいただきながらやったが、トリップ数は約 190 万と増えている。しかし、山側環状が整備されたことで極端にまちの中の交通量が減少傾向にあり、予想より大して変わっていないところもあった。これを受けて、今後どう道路整備にあたるか。また、公共交通にもシフトしていきたいという市としての全体の方向性もあるので、例えばこの路線を１車線減らしたらどうかというようなシミュレーションをした上で、方向性を検討しているところだ。平日もやるには通勤や商売上の問題もあるが、市としてはそういう方向を目指さなければいけないという認識である。

（委員）　公共交通推進条例という金沢市が提示している条例がある。その一方で、京都市が 2010 年から本格的に導入する。金沢市は、そういう条例までつくって、歩けるまちづくり環境とかいろいろやっていながら、先を越されるというのは。

（事務局）　まずは次のステップという形が大切だと思っている。

（委員長）　都市計画マスタープランも 20 年間の方針なので。

（委員）　例えば、自転車の話でも、広坂を１車線にしたりして、実験の実施まで行っている。

（委員長）　あそこはそういう形で車線を少し狭めて、自転車の通路をつくるというのは、一つの流れだと思う。ただ、広坂などで車線を削減することに反対しているのは沿道の商店主で、なかなか話し合いを進めるのが難しい。しかし、今後もやっていかなければならない。

（委員）　２ページでは市街地ゾーンということで示されているが、３ページでは土地利用区分ということで、住宅専用地、一般住宅地、中心市街地などに分類されている。先ほど、地域別に説明していただいた現状のところで、中央地域については、金沢城公園を中心とした中心市街地の商業用地の割合が 8.6％、犀川南地域の商業用地の割合が９％となっている。

一方、３ページの図面で犀川南地域は一般住宅地ということで黄色に示されているような感じがした。

中心市街地は商業が入っているところで、一般住宅地や商業用地は含まないという解釈で色塗りをされているのか。将来のマスタープランとすれば、この辺を全部一般住宅地ということで、商業を排除したような形にもっていこうということで示されているのか。

（事務局）　ここは土地利用の方針ということなので、区分は市街地と市街地外という考え方だが、住居系だからといって住居だけでなく、その地域に必要な商業であれば商業も入る。基本的なスタンスは、土地利用は純化をしていきたいということと、別の用途が出てくるので、住宅系、商業系

で土地利用の観点でこういう方向性を持っていくということである。３ページは大きな枠組みである。

個別の現状の 15 ページなどでは、きちんと位置づけをしていくという形になってくるであろう。犀川南であれば、それなりに純化をしていくことになるかと思うが、住居系の中で全部純化することはなかなか難しいので、用途できちんと押さえていくという形になるかと思う。

（委員）　これは都市計画マスタープランなので、大枠として捉えるのだね。

（事務局）　そうだ。まちなかについては、いろいろなものをきちんと適切に配置し、外側に行くに従って集積度合いは薄まらざるを得ないだろう。

（委員長）　図に対する誤解がありそうなので、表現を工夫したほうがよい。

（委員）　せっかく土地利用の面積比率で表しているので、10 年前と比べてどう変化しているのかが分かれば、その変化してきたものを止めるのか、そのまま進めるのかという判断材料になる。円グラフだけでいいが、対比する形で示してほしい。

（事務局）　７年前にやったものについては電子データがあるが、それ以前は都市計画図だけの議論で、細かくプロットするようなことはできていない。

（委員）　これはどうやって測ったのか。

（委員長）　ＧＩＳだ。その前が紙だろう。

（事務局）　７年前もＧＩＳでやっているが、以前は色鉛筆で写しているので、面積が正確に出ないのだ。もう一度それをデータ化すれば出るが、その作業が要る。７年前のデータは出る。

（委員）　上から見た面積が要るかどうか疑問だ。大和も一般家屋も、上から見たら面積は同じだが、重層的に延べ床で考えると全然集積度が違う。今後のまちづくりや都市の構造を描くときにコンパクトシティとして考えると、上から見た表面だけの面積では全然駄目だ。本来ならば延べ床で考えて、どれくらいの容積率になっているかまで踏み込まないと議論できないのではないか。

（委員長）　確かにそうだが、まだ都市計画の調査の実態がそこまで行っていない。

（委員）　そうだが、せっかくＧＩＳでデータ化して、実際の台帳とリンクしているかどうか分からないが、そういうことを考えていけば、将来、10 年後、20 年後、30 年後を考えると、そこまでデータをきちっと考えておくべきではないか。

（委員長）　確かにそうだが、そこまで数年かけてやれるか。できないことはないような気がするが。

（事務局）　例えば商業地域では容積率が 400 や 600 となっているが、金沢は戦災に遭っていないために、容積率をそのまま十分使い切っていない。半分以下である。今後の土地利用ということもあるので、そのデータベースは議論していかなければいけないと思っているが、情報を全部積み上げていくことになるので検討させてほしい。

（委員）　17 ページと 15 ページの商業用地の割合が９％だ。中央と郊外の容

積率が違うのがうなずけた。

（委員長）　今、指定されている都市計画の容積率は、適正かとか、充足すべきかというのは、かなり疑問も議論もあるところだ。充足したら下水道もパンクするので、現実には充足できない。もう少し都市計画自体も精緻化して見ていく必要がある。今まで大ざっぱに、かなり自由度高くやってきたが、今後もそれでやるのかどうかは検討する必要があると思う。

（委員）　どうも納得いかないのは、15 ページのテーマである。「にぎわいと伝統」がどうして調和できるのか。全然異質のものをどう調和させるのか。どう理解したらいいのか。

（事務局）　現在のマスタープランについても地域別のテーマを持っており、そこでも「にぎわいと伝統が調和した」という表現があったので、継承した。

（委員）　どういうことを表現したいのか。

（事務局）　非常に苦しいところだ。金沢城や兼六園には歴史的資産もたくさんある一方で、都心軸には魅力あるお店などが集積している。また、オフィス街も現在そこにある。金沢駅から武蔵が辻、片町、市役所側、兼六園と大学附属病院までかなり広域なスペースを持っており、いろいろなものが入っているので、景観審議会でまだ議論している。前回、「にぎわいと伝統が調和した活力ある中心市街地の再生」という表現だったので、それを踏襲したのだが、ここはもう少し特化するような議論があったり、方向性が別のところできちっと示されると、それを書き込むのも一つかと考えている。

（委員）　対比するものであれば調和ということは考えられる。例えば「近代的」と「伝統的」は対比する。それなら、それを調和させるということは何となく理解できる。しかし、「にぎわい」と「伝統」は全く別の次元のものなので、これを調和させるというのが納得できないのだ。言おうとしていることは十分分かっているが、表現の問題だ。

（事務局）　次回までの検討課題とさせてほしい。

（委員）　それと、23 ページの図が違っているのではないか。位置図という区域のところと、現況土地利用というところの、国道８号まで入れたのと、森本駅のエリアが違う。位置図が違っているのではないか。

（事務局）　位置図が違っている。訂正する。

【参考資料説明】

（事務局）　次回は、地元説明会に入って意見を聞き、集約して、方向性を示すことになるので、９月下旬に予定している。また案内させていただく。重点地区については、地域でもいろいろ議論が出てくると思うので、意見をいただきたい。本日はどうもありがとうございました。

以上